第23話 同じ教室にいても近さを感じない？
ムーアの~~相互対話~~交流距離理論

Transactional Distance Theory

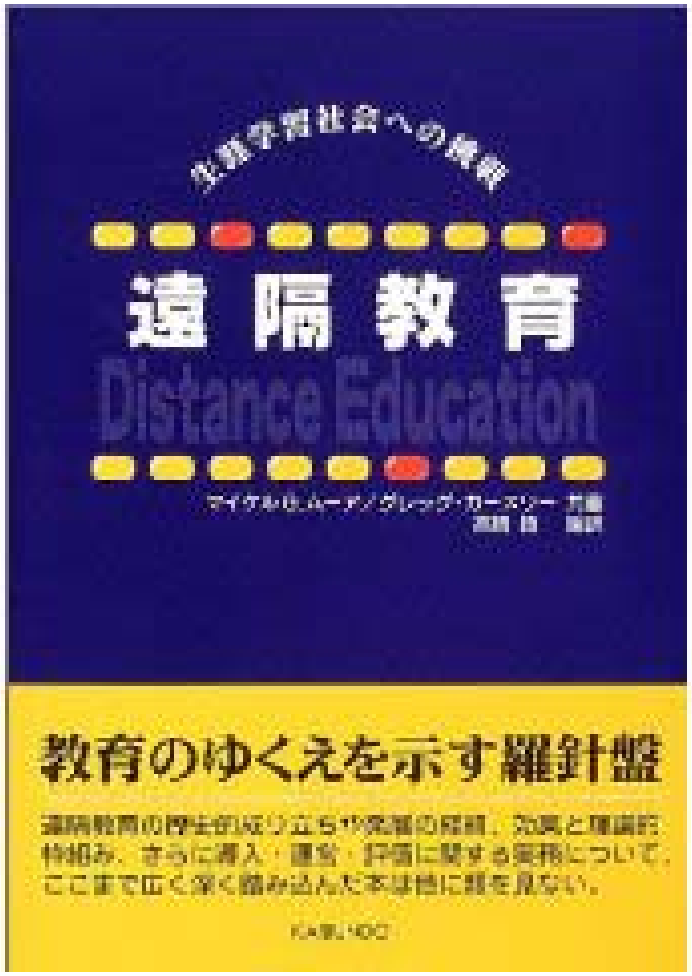
cf. OECDの「eラーニング革命」
cf. サイモンソンの同価値理論

- ムーア：1970年代に「遠隔教育の概念を変えろ」と主張
  - 地理的距離でなく心理的距離で語るべし！
- 心理的距離は構造×対話×自律性で決まる＝交流距離（TD）
  - 構造＝コンテンツ×学生、対話＝インストラクタ×学生
- ムーア理論になかったもの＝学生×学生の交流
  - 通信教育では不可能だったがeラーニングでは可能になった要素
- ブレイの比較表：　TD(対面講義）＞TD（eラーニング）？
- 帰結：キャンパス内ブレンド型eラーニングで実現すべきことは、交流距離を縮めて自律性を育てる設計指針と実践知
  - ヒゲ：自律性は環境変数ではなく目的関数と考えるべきだ！ cf. 9教授事象
  - 毎回クイズ（構造）＋リンク集（構造）＋掲示板（協調→対話）の意味

©2009 鈴木克明

マイケル・ムーア教授

ペンシルベニア州立大学の研究室にて（2008.1）



海文堂出版（2004）

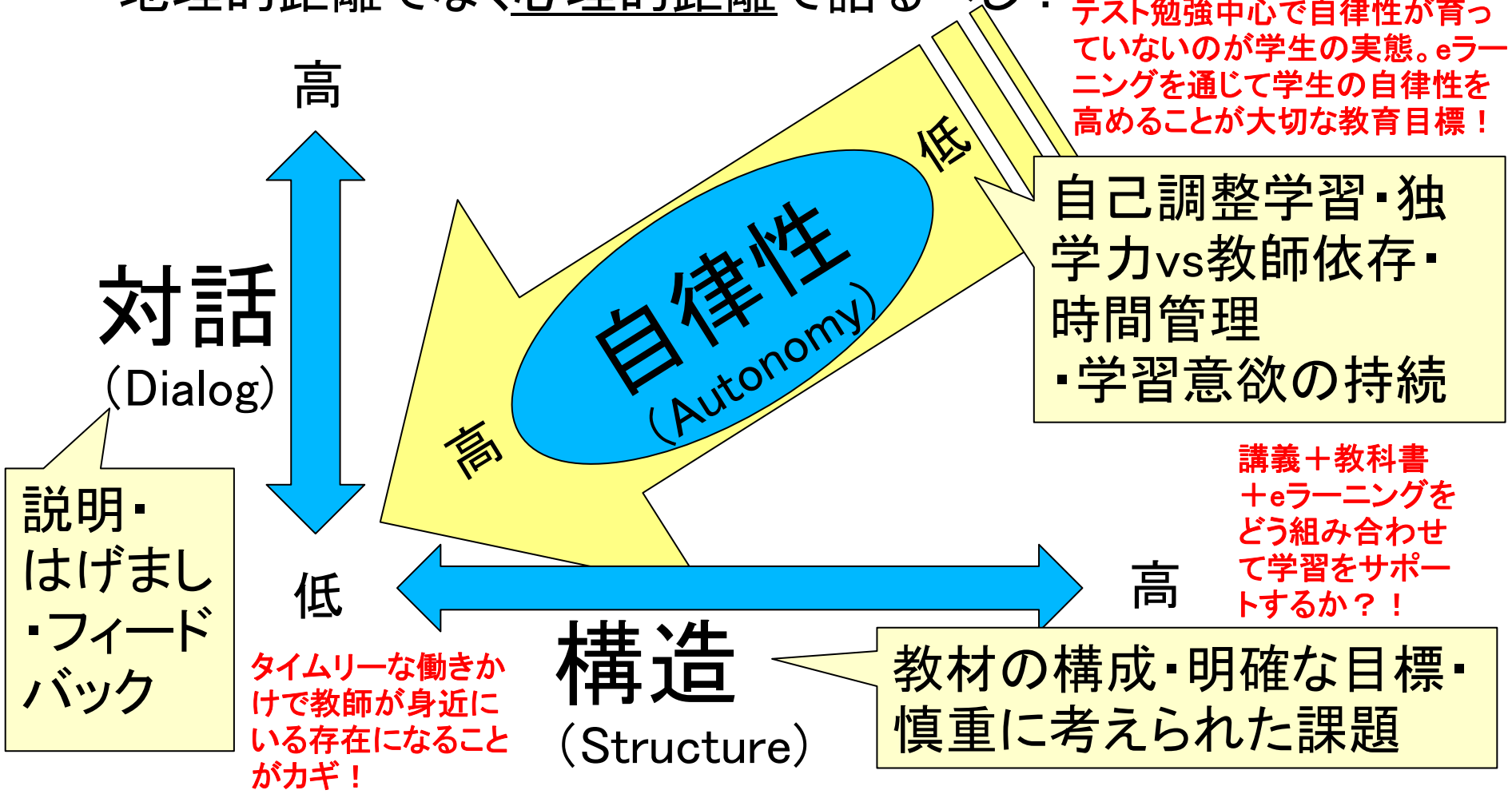
©2009 鈴木克明

遠隔教育の概念を変えろ！
（ムーアの主張:1970年代）

- 遠隔教育とは、単に学習者と教師が地理的に離れているということではなく、より重要なのは、教師と学習者の関係性の世界を示す教育学的な概念であるということだ
- distance education is not simply a geographic separation of learners and teachers, but, more importantly, is a pedagogical concept describing the universe of teacher-learner relationships.

遠隔教育の相対対話距離理論（ムーア）

地理的距離でなく心理的距離で語るべし！



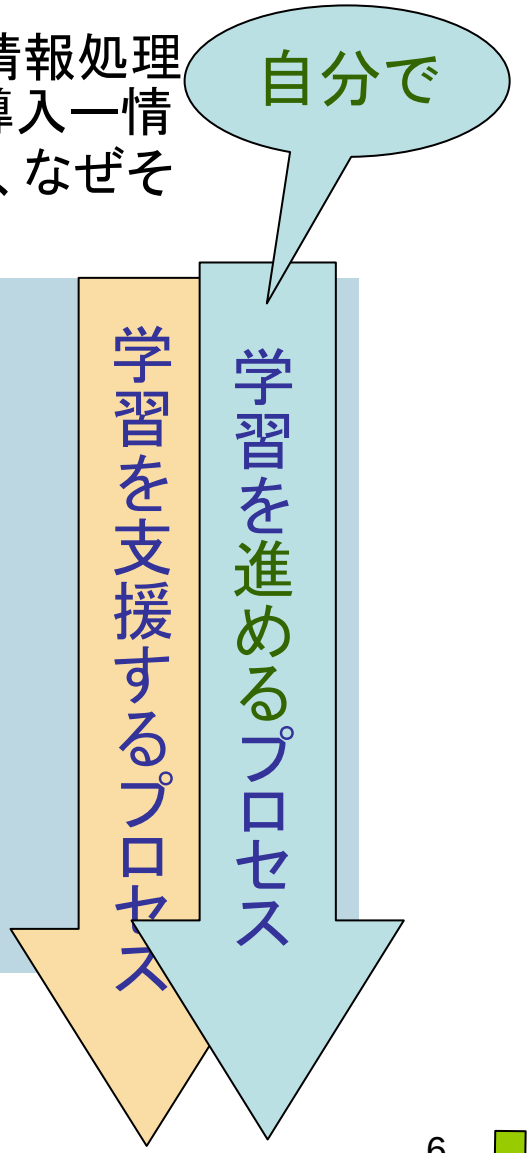
教育場面ごとの機会と要求比較表
（Bray 2007による）

教育場面	手法など	自律性要求	対話	構造	協調	TD
対面講義	講義、教科書、試験	低	中	中	低	8
対面グループ学習	討議、文献、試験、プロジェクト	低	高	高	高	4
遠隔通信型	教科書、リポート	高	低	高	低	10
遠隔非同期型	講義、教科書、リポート、課題	高	中	高	低	9
遠隔同期型（ビデオ会議）	講義、討議、リポート、プロジェクト	低	中	中	高	6
遠隔（インターネット型）	非同期討議、レポート、プロジェクト	高	低	高	中	9

出典：Bray, E. (2007). The distance learner: Variables of interest. 四日市大学環境情報論集　10（1／2）　35-48

9教授事象（Robert M. Gagne）
学習支援のための働きかけを、認知心理学（情報処理モデル）をベースに9種類にまとめたモデル。導入ー情報提示ー学習活動—まとめで何をやるべきか、なぜそれが効果的かを説明。

- 事象1：学習者の注意を獲得する
- 事象2：学習者に目標を知らせる
- 事象3：前提事項を思い出させる
- 事象4：新しい事項を提示する
- 事象5：学習の指針を与える
- 事象6：練習の機会を与える
- 事象7：フィードバックを与える
- 事象8：学習の成果を評価する
- 事象9：保持と転移を高める



講義にはどの事象が含まれているか？
講義は、学生相手にしか成り立たない教育方法

教師は認識を新たに！
（eラーニング革命：OECD、2000）

- 定時制や遠隔教育の学生であることが不利であると考えるのではなく、今や、教師は認識を新たにしなければならない。遠隔教育のみならず一般学生や対面教育の学生も含むすべての学生に対して情報通信技術がもたらす利点は何か、ということについてである。教師は、遠隔教育という教育方法を次善の解決策と考えるのではなく、自分たちの主張する教育手法をとらえ直し、それがどの程度説得性のある方法で提供できるのか自問自答しなければならない。（中略）対面教育機関の教師は、設定した学習成果を達成するように指導することに強い責任感を持っている遠隔教育の教師から多くのことを学ぶことができる。（OECD, 2000, p.94＋p.125-126 ）

OECD (2000)『ラーニング革命：IT=情報技術によって変わる高等教育』エルコ

同じ形より同じ価値を追求

同価値理論（サイモンソン）

- 通信技術の発達などによって、擬似的な遠隔教育環境（バーチャル教室など）が可能になってきている現在、何が遠隔教育で何がそうでないかを区別しようとするよりも、遠隔・通学を問わずすべての教育経験に「同等の価値」を持たせることに主眼を置くべきだ。
- それぞれが置かれた環境によって、学習の経験は様々な様相を呈するであろうが、全体として同価値になるように学習の環境をデザインすべきだ。ここ で、同じにすることを目指すという意味は、「同型」ではなく「同価値」であり、たとえ教師と生徒が同じ場所と時間を共有する形でなくても、お互いの意思疎通を図ることは可能だ。
- 遠隔教育を「普通でないもの」、「通常の学校とは違うもの」と捉えない姿勢を強調している。

Simonson, M. (2000). Equivalency theory and distance education. TechTrends, 43(5), 5-8.